すべし。而して殊に慈鎮和尙の示寂に際し、其座に淨土西山派の祖たる證空上人の在りしといふが如き、從來殆ど模糊たりし慈鎮和尙と證空上人との關係に、正に炬火を投ずるものとして珍重すべし。

猶此の舊鈔本「慈鎮和尙傳」の本文に就きて、一々之を仔細に尋繹檢覈せば、更に得る所多かるべきことは殆ど疑を容れず。然るに予は素り國史を專攻する者にもあらず、自ら其任に非ることを知れば、乃ち今は姑らく一言紹介を試みるのみ。若し其本文の全部の發表の如きは、夙に畏友橋川正君の切なる慫慂あり、將に近日を以て之を世に公にし、橋川君並に世の國史家の精細なる研究を待たすとす。（完）

西印度ナーシックに於けるゴータミープトラ窟に就て（下）

文學士　澤村專太郎

四

この窟院の建築的裝飾の意匠は、すべて其前面の外部に集注せられてゐる。もと洞窟はその性質に於て中空に屋蓋を投現するが如き事の出來難い事情にあるから、その外形上に美觀を發揮する事は、その前面に限局せられてゐるのである。從つて洞窟前面に於て建築上の外觀美を保持せむとす

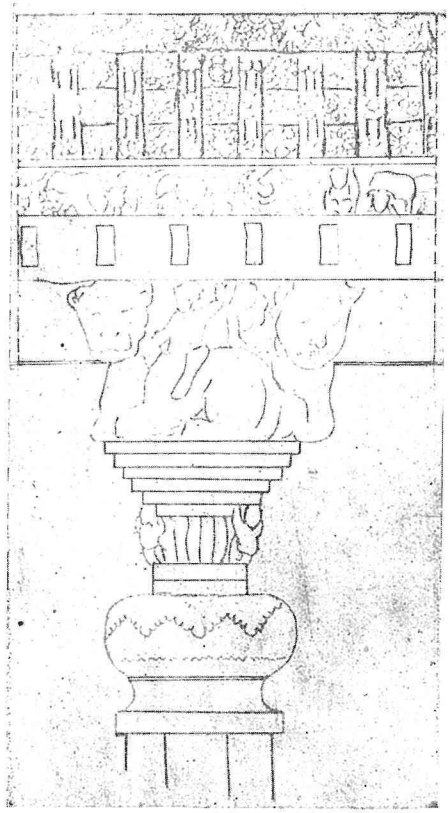
る事は、窟院設計家の慣用手段であるが、此意味に於て最も古くから建築的裝飾の凝らされたものは、支提に屬する諸洞である。毘訶羅に屬する洞窟に於ても、時代の降るに從つて、之れに裝飾美を發揮せむとするものが現はれてゐるが、この窟院の如きも亦多少這般の意味に於て注目すべきものゝ一である。

この前面に於ける裝飾は、すべて建築構造に基いて意匠せられたもので、即ち建築構造上の意匠を彫刻に依つて現はしてゐるのである。先づ其前簷は欄楯形を表はし、其下には木材構造を示した桁を刻出し、之を支ふるに石柱を以てしたものである。柱はすべて前廊の外面に沿うて六基あつて、別に左右兩端には壁柱が現はされてゐる。柱の下端には、前簷に於ける欄楯形と同樣なる欄干を表はしてゐるが、更にその下には柱形を表はして、その中間には陽刻を以て一軀宛の守護神と覺しきものを陽刻してゐるのである。而して是等の細部には彫刻的裝飾が加へられ、頗る典麗なる趣を示してゐる。即ち之を構造的裝飾から云へば、木材構造に基いた意匠を示してゐるものと云ひ得られるが、更に之を仔細に見れば、幾多の興味ある要素を有つてゐる。

殊に上下の欄楯形に於ける裝飾的彫刻文樣は、甚だ多趣味なるものである。もと欄楯の構造は礎材と隅柱と間柱と横木と、而して笠木に依つて成立してゐるものであるが、この兩種の欄楯形に於ては是等の表面のすべてに彫刻的裝飾文樣が加へられ、前面より望めば、全く裝飾文樣の集團と考へられる程である。其上方なる欄楯形に於ては、笠木に於て半輪蓮花に花束繫を配し、其中間を睡蓮形に依つて繫いだ横帶陽刻文樣があり、横木の上中下の三者には、柱間に各一個の花文を刻し、柱に於ても此横木に應じて上中下の三部に各一個

乃至半個の花文を刻してゐる。其礎材に當れる部分には、牛、象、獅子、摩竭羅魚、人物形等に蔓草を配した陽刻がある。下方に於ける欄楯の裝飾的彫刻の如きも、また前者と大なる相異がない。

第一圖



かゝる裝飾的彫刻を有する欄楯の類は、Sânchi, Buddhagaya, Bharhut を始めとして Amarâvatî 等の佛教的遺跡から發見せられた其石製遺物と比較すれば、その性質を更に明確にする事が出來る。その文樣の性質から考へると、Amarâvatî のものに較類似する所があつて、その年代に於ても彼此の相接近したものなる事が知れる。殊にその花文が其一個に就いても著しく複雜なる構圖を示してゐるのみならず、欄楯全體の裝飾的意匠の如きも、甚だしく豐富なる狀態を呈してゐる點に於て、彼此の類似してゐる事が認められる。この前面に於ける上下兩樣の欄楯形の陽刻が、洞內の正面に於ける陽刻佛塔に於ても表はされてゐるが、是れも亦花文裝飾を有し、その性質の如きも亦全く其趣を一にしてゐる。（第一圖）

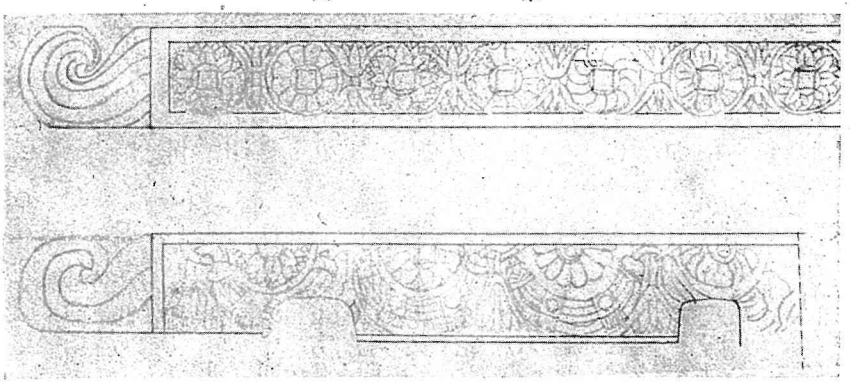
此欄楯と共に、更に注目すべきは、此洞窟の入口に於ける裝飾的彫刻である。是は Sânchi に於ける諸佛塔に遺存する門（Trana）と同樣なる形式

の門形を表はしてゐるが、是は彼れに比して少しく簡單なる形式で、上方には横木形の二個のみを有するに過ぎぬ。其兩端は二個共に象鼻の如く捲形をなしてゐるが、是れ亦 Sânchi のものと、併せて考ふれば、其原始的形式を明かにする事の出來るものである。蓋し Sânchi に於けるものは、其兩端が渦文狀に刻せられてゐる。彼此の形式を比較すると、此種の門形の上部に於ける横木は、もとアーチ狀に彎曲した形狀にあつたので、此原始的形式が是等の横木の兩端に留められてゐるのである。Amarâvatî の彫刻的遺物のうちには、此種の原始的形式を想起せしめるが如き陽刻が見られ得るが、是等と併せて考ふれば、愈々此横木に於ける象鼻形が門形の構造的原意を示すものである事が認められるのである。この横木の下方のものゝ兩端と門柱とには獅子形の持送が彫刻せられてゐる。同じく上方の横木の兩端にも一種の柱形の持送が表はされてゐる。下方の横木の入口に接する下面兩端には繰込まれた截形が一個宛ある。是れは恐らく入口の戸を附加する目的を以て作られたものであらう。此門形の表面にはすべて陽刻の裝飾的彫刻が加へられてゐる事は、Sânchi に於けるものと同樣である。

先づ上方なる第一の横木には、左右兩端の象鼻の中間に七個の圓輪蓮花文の繼列があつて、其の花文と花文との中間は、上下に開ける睡蓮側面文を以て連結せられてゐる。第二の横木には、かの前簷に於ける欄楯の笠木に於ける文樣と同樣なる裝飾文が刻せられてゐる。第一の横木と第二の横木との間には、八基の支柱形と二基の柱狀持送とに依つて、支持する勢ひをなしてゐる。各支柱を隔てゝ八區の面が作られてゐるが、その中央のものは最も大にして、之れには中心に塔形を刻し、其左右には各一軀の夾侍像が表はされてゐる。此

左方なる一區には柱上法輪形を陽刻し、之れに隣接する二區には各一軀の合掌立像を表はしてゐる又中央塔の右方なる一區には聖樹を表はし、之れに隣接せる二區には各一軀の合掌立像が表はされてゐる。此門柱には左右共にその下端に力士形と覺しきもの一軀を表はして、之を支ふるの勢をなさしめ、二てゐる。門柱は左右共に各々五段に區分せられ、各段には男女若くば婦人等の風俗的陽刻が表はされてゐる。此類の風俗的彫刻は、屢々佛教寺院の門柱に繪畫又は彫刻に依つて現はされてゐるもので、Ajanta を如めとして、西印度に於ける多數の石窟寺に於ける入口に

第二圖

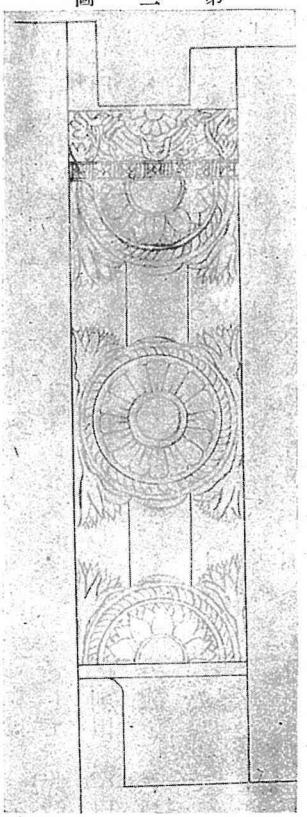


於て見られ得るもので、一種の神話を現はしたものゝやうである。此門柱の左右には、右手に蓮花を執り、左手を腰の邊に置ける守護神の立像が各一軀造刻せられてゐる。要するに此洞窟入口に於けるトラナ形は、印度窟院に於ける入口の構造的裝飾として類例甚からざるもので、印度の一般建築物に於ける構造の一種の樣式を語るものと云ひ得られる。之を以て Taxila に於ける Sirkap の第一號祠堂に於ける建築的礎部に表はされた三種門形と比較し、且つ其一が全く之れと同一樣式なる事を見れば、愈々研究上此門形の興味ある資料とせらるべきものなる事が知

れるであらう。（第二圖）

叙上の構造的裝飾と共に逸し難きものは、前廊の外面に沿ひて造られてゐる柱及び壁柱である。此柱はすべて六基あるが、その二基は下部が破損してゐる。其柱身は八角形をなし、柱頭は壺形をしてゐる。此種の柱頭彫刻を有する柱は、古式なる支提洞に於て屢々見る所のもので、此洞窟より後れて成りし洞窟に於ても往々其變形と認むべきものが傳へられてゐる。柱身は平滑なる八角形にして、裝飾的彫刻の見るべきものがないけれども

第三圖



其壁柱に至つては、甚だ注目すべき彫刻的裝飾を傳へてゐる。壁柱の形式は大體に於て平面狀をなしてゐるけれども、其面を三分して輕く繰形を現はしてゐるが、是は要するに八角柱の意匠を模擬した形式を示してゐるものである。其上端には、かの門柱の第二横木の文樣と同樣なる彫刻的裝飾帶を表はし、其下には細き横帶を刻して、四瓣花と幾何文樣とが交互に連ねられてゐる而して柱身の中央部に於ては、圓輪の緣に細き繩形の裝飾を以て緣どられた中に、一大蓮花を刻出有し、その上方には四隅に童子形の持送を以て方形の皿板を支へ、漸次上部に至るに從ひ其大さを加へて六段を重ねてゐる。其最上端には或は象、或は牛、或は獅子の一對を前面に表はし、之れに駕乘する數軀の人物を刻して前簷を支ふるの勢をな

してゐる。而して其左右兩端は上下に開ける二個の睡蓮側面文を以て、其裝飾を構成してゐる。之を中心として上部及び下部に各半圓輪の蓮花文を陽刻してゐるが、此上下二者の花文は同一樣式のもので、中央のものとは較々其趣を異にしてゐる即ち中央の花文は其花瓣の周圍部が圓味を有して寧ろ扁平に近きものであるが、上下の花文にあつては其周圍部がとがつて、同時に復瓣をなしてゐるのである。すべて是等の彫刻花文は輕き隆起を示してゐるに留まり、寧ろ强き凹凸を示してはゐない。從つて文樣としては較々纖好に傾き、繪畫的意匠に即して彫刻的意匠の大膽なる風趣を加へざる觀がある。或は木材彫刻に於ける刀法の鋭利なる調子を殘せるが如き趣があつて、大伽藍に於ける裝飾的文樣としては、較々纖細に過ぎたるが如き趣を殘してゐる。此點に於て是は Ajanta の第拾六番洞に於ける彫刻的文樣に類似したる特徵を有してゐるが、此花文は寧ろかの彫刻的特徵よりも、一層繪畫的であつて、かれの先驅をなすが如き觀を示してゐる。(第三圖)

凡そ壁柱に於ける彫刻的裝飾は、印度に於ける洞窟的寺院の建築的裝飾として、最も重要なる要素を爲すものである。殊に毘訶羅洞に於ける裝飾として、此壁柱面を捉へ、莊重なる大花文を之れに刻出し、以て洞窟の內外に於て極めて嚴肅なる外觀を示さむとする事は、洞窟建設家の最も意を用ゐた點である。けれども毘訶羅洞が尙ほ著しき發達を示すことなく、其裝飾に於ても必ずしも精力を傾注するに及ばなかつた頃に於ては、壁柱花文の如きは固より見るべきものを出してゐなかつたが、毘訶羅が一面に於て僧尼の住房であり、他面に於て信仰的對象の祠堂となつて、儀式的意味を加へ來るに及んで、次第に他の裝飾的意匠と共に發達し來るに至つたのである。Ajanta に於ても

第拾六番及び第拾七番の兩毘訶羅洞は、從來の繪畫的裝飾主義より一歩を進めて、之れに彫刻的要素を加味せむとするの勢ひを示すに至つてゐる。けれども尙ほ是等の洞窟に於ては、此種の大花文を壁柱面に投現する迄には至つてゐない。唯他の柱に於て見たる繪畫的文樣を彫刻化したと云ふに留まつてゐる。然るに此洞窟に於ては既に明かに壁柱上に大花文を刻出せむとするの風潮を示してゐるのである。Ajanta の第拾六番洞は洞窟に於ける多くの他の特徵に於て、此洞窟よりも遙かに進歩し、從つて其年代に於ても後れて成つたものである。卽ち之よりも百五拾年乃至二百年の後に於て掘開せられたものと信ぜられるが、此洞窟に於て既に明かに毘訶羅洞の彫刻裝飾に對する意途の現はれ來れる事を見るは、極めて興味ある事實である。Ajanta に於ては、此洞窟と年代を一にし、又その性質を同じくする毘訶羅には乏しきが故にこのゴータミープトラ窟はかの一大繼列に於ける暗點を補綴するに於て、甚だ重要なる資料となし得られるのである。卽ち少くとも此壁柱面に於ける圓輪花文の如きは、かの後世に於て一大發展を遂げた所の洞窟壁柱彫刻文の前驅をなし、而して其發達の原始的段階を明かにするものと見られ得るものである。けれども元來洞窟に於ける柱の樣式は、多くは八角柱であるが故に、かくの如き圓輪花文は、一般の柱に於ける裝飾文としては、不合理である。換言すれば壁柱に見るが如き圓輪花文は、一般の柱に於ける裝飾文樣より脫化し來るべきものではない。是れ研究上更に注目を要すべき點である。然らば是れ果して何者の意匠より來つたのであらうか。

此問題の解決は、印度古代の建築裝飾上、可成に重要なる意義を有するものである。若し予の見る所にして誤なしとすれば、是れは正しくかの欄

楯に於ける中間柱に於ける裝飾的意匠と結合して考察すべきものである。既に洞窟前面の欄楯形彫刻に於て見たるが如く、此種の柱面に於ては横木に呼應して、三段乃至四段に分つて、花文を刻する事が、極めて古い時代から試みられ、既に西紀以前に於ける遺物に於ても、此種の作例を留めてゐる。此種の意匠は石造の欄楯は勿論、木造の欄楯に於ても試みられてゐたと信ずべき理由がある而して更にその原始的意味に遡つて考へると、石造欄楯は固より木造欄楯の模倣に外ならぬが、木造欄楯に於ける此種の圓輪文は、恐らく薄き金屬製の裝飾具であつたものと考へられる。卽ち之れから脫化して遂には木造及び石造の兩者に通じて欄楯の中間柱に於て彫刻若くば繪畫を以て表はされるに至り、更に之れが變轉發達したものと考へられる。かくの如き壁柱上の裝飾圓輪花文は要するに此種の欄楯に於ける意匠より脫化したものと云ふ事に歸するのである。

五

此洞窟には以上の如く、建築的構造に結合せる裝飾的彫刻を存せるも、之を單獨に彫刻方面から考察すべき材料には、寧ろ乏しいのである。けれども既に言及した所に依るも、多少それが遺存する事は知り得られる。卽ちその遺存する著しきものは、洞窟前の下方欄楯の下に於ける六軀の像と入口の門形の左右柱外に於ける二軀の立像と、門柱に於ける構圖的彫刻と、而して洞内正面に於ける塔樣彫刻に結合せる彫刻とである。

概言すれば、是等の彫刻は其技巧に於て必ずしも卓出したものとは云ひ難い。けれども其樣式に於て西印度の彫刻的遺物の研究上、極めて重要なる成分を有するものである。先づ前面下方の彫像は護法神であるが、其姿勢及び均衡は甚だ粗野に

して技法の練熟を缺いてゐる。從つて彫刻としては、寧ろ見るに足らないものである。然るに其彫刻的技術に於ては、之れに似たる特徴があるけれども、入口の門柱左右に於ける二軀の立像は之よりも較々見るべきものがある。その兩者は寺門を護持する勢にあるが、其姿態は肥滿して、其背は寧ろ高くない。然しながら其彫刻的精神に於ては放膽なる裡に一味の力强き氣魄を存してゐる。從つて全局に於て練熟せられた技巧的卓拔は認められないけれども、素樸の技風に於て一種の含蓄を有つてゐる。之を後に於て西印度に發達したる彫刻に比べると、明かに古調を存する事が認められ一見してかの Kârlê 及び Kanhêri の石窟寺に存する彫刻と類似してゐる事が認められる。其技風のすべての點と共に、其彫像の風俗に於ても亦同樣である。此風俗上より云へば、Ajantâ の第九番洞前壁の畫にも多少類似してゐるが、殊に第十番洞に於ける周壁の畫に甚だしく似たる點があるけれども其技術的特徴に於ては、此彫刻の方が寧ろ粗放なるを免れない。

門柱の構圖的彫刻に於ても其男女人物の姿態及び風俗に於て、亦前者と似たるものがある。然し此陽刻に於ては男女の人物が夫々活躍して、其姿態の表狀に一種の活趣を示してゐる。是れは印度古代に於ける藝術的特調の一となすべきものであるが、此彫刻に於てもよく這般の特徴を傳へたものである。洞內の正面なる塔樣彫刻の左右に於ける供養者の婦人像は、門柱左右のそれよりも、一層自然的である。而して其姿態の如きも、兩者共に變化があつて、門柱左右のものゝ如く單調ではない。其樣式に於て亦かの Kârlê 及び Kanhêri のそれに、殊によく似たる點がある。其技巧の洗練を缺くが如くして、而かも一種の感覺的表精と技巧とに富めるが如きは、特に著しく看取せられる

特徴とせねばならぬ。

凡そ是等の諸彫刻を以て代表せられ得べき西印度に於ける最も古き彫刻遺物の集團を仔細に吟味すれば、幾多の注目すべき暗示が與へられる。その最も重要なるものゝ一は、是等の彫刻に於て、所謂犍遮羅式彫刻の感化の何等著しき痕迹を留めざる事である。若し之を以て更に古き時代の彫刻的遺物の上に、その系統を討ねる時は、寧ろ紀元以前の諸彫刻の上に、之を求めねばならぬものがある。卽ちかの Kushan 期、若くばそれ以前に於ける孔雀王朝文化の圈内に生長した所の更に古き時期の彫刻的樣式を繼承傳習したる痕迹の著しい事が認められる。若し吾人の所見にして誤なしとすれば、所謂西印度式なる彫刻、卽ち更に後に至りて此の地方に於て發達を遂ぐる所の佛教彫刻は是等の Nāsik, Kārlē, Kānherī 等の古彫刻より流れて發達をなせしもので、その間多少、中印度式の典麗なる作風の刺戟を受けたとは云ふも、其根蔕に於ては此種の古彫刻の精神と樣式を繼承したものである。從つて此時期以後の西印度に於て、かの犍遮羅式彫刻感化の深きものを留めざる理由は、要するに此點に歸着せしめらるべきものがあると思はれる。

かくの如くゴータミープトラ窟は、その洞窟の建築的方面に於ては、必ずしも雄大なるものではないが、その銘文と共に建築的性質及び之れに加へられたる裝飾的彫刻を始めとして、洞内の塔樣彫刻の如き、何れも興味ある研究資料を有するものである。卽ち

第一　毘訶羅洞の建築的精神と其樣式との發展の一轉する過渡期の作物たる事を示し、

第二　其建築構造的意匠に結合する彫刻が欄楯及び門樣等、印度古代の建築史上に於ける諸問題に對する暗示を與ふるのみならず、

第三　其彫刻的遺物の樣式の如きも、西印度彫刻の源流が犍遮羅彫刻とは關係なきを見る上の資料となすに足るものである。

而して其銘文が印度の一般歴史研究上にも、幾多の參考すべき根本資料たる點に於て、此洞窟は西印度に存する多數の石窟寺のうち、最も注目すべきものゝ一と云はねばならぬものである。（完）

日本のビスマルク

文學博士　甲　陰

今茲に太平洋を東航中の私には、かゝる折に恵まるゝなる一種特有の閑日月こそあれ、同じ甲板の上に米、英、露、獨、支、比、暹なんどの幾多の異人種や、樣々の使命を帶びた色々の職業風俗の人たちを乘せた船中の目狂はしい生活に入り浸つたこの旬日、とても纏つた勉强氣分の起りさうにない、けふまでにやつと四十頁未滿の一小冊子だけを讀み上げたばかりである。これは、恐らくばこの航海中の唯一の讀書となつて了ひさうである。さうして思ひ返すと、この著書は、確かに同人諸君の一顧に價ひするやうに考へられるから、一筆これを御見參に入れたい。

『國民主義が、國家組織の基礎となつてゐる世界史的時代において、凡そ一國の內部に於て廣大な變化を實行完成した國々の內で、まさしくやつと嫌や〳〵ながら外國との通商貿易を開いた、あの